

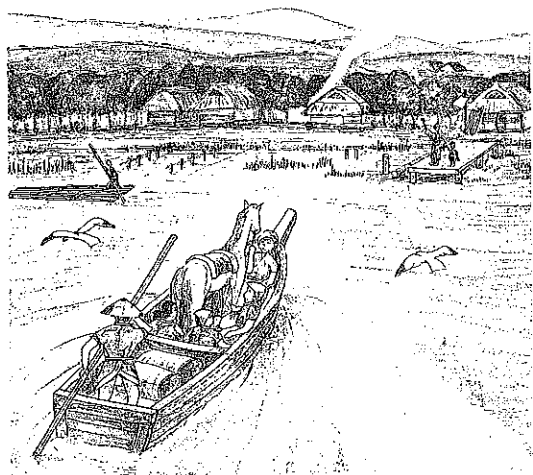
五 たちばな橋

きょうも、たちばな橋をたくさんの人々や自動車が行き来しています。この橋は、宮崎市のうつりかわりを長いこと見守ってきたいじな橋なのです。

今からおよそ百年ぐらい前は、宮崎市の中心を

流れる大よど川には橋がかかっていませんでした。大よど川の北と南をむすんでいるのは、小さなわたし舟ぶねであったため、人々は、行き来するのに大へんくろうしていました。強い風がふくと、とてもきけんでした。また、雨で川の水かさが増え、舟ふねが出ないこともたびたびありました。

とくに、急ぎの用やにもつの多いときなど、大へんこまりました。



りようぎしの人々は、だれもが、

「ここに橋があるとたすかるのになあ。」

と書いていましたが、何しろ、川はばが広く、水かさが多いので、橋をかけるなどとてもむりなことだろうとあきらめていました。

そのころ大よど川の南の地域ちいきに「福島邦成ふくしまくになり」という医師いしがすんでいました。邦成は舟で大よど川をわたる人々のようすをながめては、

「わたしの力で、何とかできないものか。」

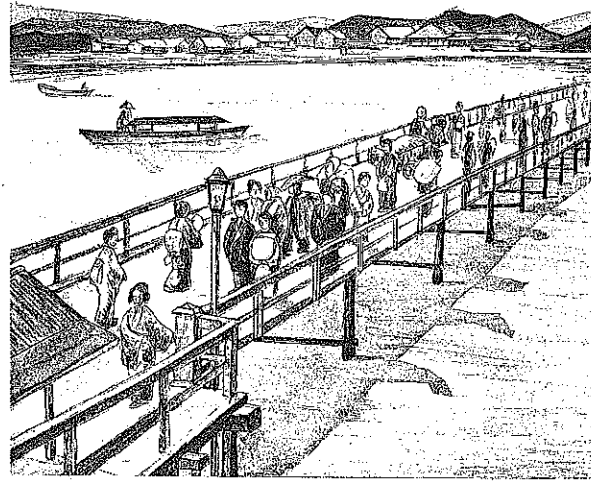
と考えていました。大よど川をばさんだ北と南の地域を一本の橋でむすぶことはできないか。むすび合えば、きっと人々の行き来もよくなり、発てんするにちがいないと思うようになりました。

それからは、まい日のように川岸に立って、橋をかける場所や方法などを考えていました。そのことを北の地域の小西という人にそうだんしたところ、邦成の気持ちをおくんで、よろこんで橋のせつけい図をつくることをやくそくしてくれました。

邦成は、

「よし、何とかして橋をかけよう。」

と決心して、橋をつくるためにひつようなお金や人を集めました。



じゅんびをととのえた邦成は、さっそく橋をかける工事にとりかかりました。この工事は、大へんむずかしい工事でしたが、邦成は県外から橋をかけるせんもん家をよんだり、村人たちにきょうりよくしてもらったりして、一度にたくさんのがわたれる木の橋をつくりあげました。その橋は、はば四メートル、長さが三百八十五メートルもある大きな橋でした。

橋がかんせいした日には、工事にきょうりよくしてくれた人々だけでなく、あちらこちらの村や町から、たくさんの人々が集まってよろこび合いました。

橋の名は、邦成によって「たちばな橋」と名づけられました。

その年の八月。邦成にとってかなしいできごとがありました。たくさんのお金をかけて、みんなのきょうりよくでつくりあげた「たちばな橋」が、大雨で水かさかふえ、流されてしまったのです。しかし、邦成は、もう一度決心し、お金を用意し、人を集めてその年のうちにふたたび「たちばな橋」をつくりあげたのです。

それからは、雨がふっても風がふいても、人々は安心して川をわたれるようになり、人の行き来も多くなりました。そして、宮崎の町もたちばな橋をはさんで大きく発てんしてきました。

今では、りっぱなコンクリート橋にかわった「たちばな橋」は、宮崎の町をきづく大きな力になっているのです。

